

戦争ドラマスペシャル

## 消えた赤紙

作：岡崎道成

演出：小川政弘

### ★登場人物

---

北川泰三 主人公。村役場兵事係。近眼。26 歳  
坂井俊夫 クリスチャン青年。北川の親友。26 歳  
坂井春江 俊夫の母 56 歳  
佐々木祐三 村長 52 歳  
門田平吉 村人。32 歳  
門田敏江 平吉の妻。30 歳  
加代 10 歳  
太一 8 歳  
ナレーター 語り部。初老の北川泰三。50 代

### <前編>

---

村長 今回の召集は武田元治、山本勇太郎、門田平吉、以上 3 名。本人不在の場合は、あらかじめ届け出のある代理人に間違いなく交付するように。确实、迅速を心がけてくれたまえ。

北川 分かりましたっ。行って参りますっ。

北川(モノ)(ため息)はあ…3 名か。

N 威勢よく返事をしたものの、わたしの心は沈み込んでいました。いえ、今日が初めてではありません。しかし、何度経験してもこの役目に慣れることはありませんでした。なぜなら、わたしが届けていたのは召集令状、いわゆる赤紙だったからです。

タイトル 岡崎道成・作 戦争ドラマスペシャル「消えた赤紙」 その前編

N わたしは北川泰三。1941 年(昭和 16 年)に、太平洋戦争、当時は大東亜戦争と呼ばれた大きな戦争が始まりました。当時、わたしは埼玉県のとある村役場の兵事係をしてい

ました。兵事係というのは、村人の兵役に関わる一切の事務手続きを行う役目です。徴兵検査、志願兵の募集、名簿の整備。仕事はいくらでもありました。中でも一番つらかったのが、召集令状の交付と戦死者の通知でした。

3年間の死闘の果て、次第に敗色が濃くなった1944年(昭和19年)の初夏のある日―。

北川 門田さん、門田さ一ん。

門田敏江 はい…あつ、き、北川さん。

北川 あ、奥さん。旦那さんはおられますか？

敏江 あっあの、うちの人に、まさか…

北川 …はい。門田平吉さんに、赤紙が来ました。

敏江 そんな…また兵隊になんて、何かの間違いじゃ…。

北川 いえ、間違いじゃありません、奥さん。…その…ご苦労様です。

敏江 う…(声を殺して泣く)

平吉 (奥から)どうした、敏江。…北川さん。

敏江 あ、あなた…

平吉 わたしにですか？

北川 ご苦労様です。あなたに赤紙が来ました。あさって朝9時に浦和連隊に出頭してください。

平吉 あさって…。

北川 ご武運をお祈りします。

敏江 なんでうちの人か？

平吉 敏江。

敏江 この人、前にもシナに兵隊に行ってるじゃないですか。なんでこの人ばかり。

平吉 お国のためだ。

敏江 でももう30過ぎですよ。子供だっているし、ほかにまだ兵隊に行っていない人だっているのに、どうしてまたあなたなんですか？…北川さん、あんまりじゃないですか。

北川 いえ、自分が決めているわけでは…。

敏江 じゃあ北川さんは？ どうして北川さんは兵隊に行かないんですか？ おかしいじゃありませんか。

平吉 敏江、やめなさい！

敏江 (泣きべそで)あんなたちが決めてるんでしょ。この人なら黙って兵隊に行くからって。み

んな言ってる、村長とあんたで決めてるんだって。

平吉 敏江！（ビンタ）

敏江 わあー（顔を覆って泣く）

N 村の男たちは、わたしが玄関に現れると「ついに来たか」と覚悟を決めたようです。しかし女たちにとっては、一家の大黒柱を、大切な息子を、たった一枚の赤紙で突然奪い去られるのです。この奥さんのように口に出して言えなくても、恐らくだれもが、赤紙を持ってくるわたしを地獄の使いのように思っていたでしょう。わたしは奥さんのむせび泣く声から逃げるように、その家を後にしました。

加代 あ、北川さんだ。

太一 北川さんだ。

北川 なんだ、加代と太一か。

加代 北川さん、どこ行くの？

北川 仕事の帰りだよ。これから役場に戻るんだ。…2人とも、お父ちゃん兵隊に行っちゃ寂しくないか？

太一 寂しくないよ。父ちゃん、満州でお国のために戦ってるんだ。この間、手紙来たよ。

北川 そうか。お前たちもしっかり頑張れよ。

太一 うん。ねえ北川さん、僕、大きくなったら海軍に入るから、覚えといてね。

北川 え？

太一 僕の赤い紙書くときさ、海軍にしといてね。忘れないでよ。

北川 赤い紙って、召集令状のことか？

太一 うん。父ちゃんは歩兵だったけど、僕は絶対飛行機に乗りたいから。

北川 あのな、太一。あの紙はおじさんが書いているわけじゃないんだぞ。

加代 うそ。お母さんが言ってたよ。

北川 なんて？

加代 役場で北川さんたちが話し合って、だれを兵隊にするか決めるんだって。うちの父ちゃん、体が丈夫だから歩兵になったんだって。

北川 （苛立って）あのな、違うんだ。おじさんが書いてるんじゃない。役場で決めてるんじゃない！ 違うんだよ!!

二人 （怖くて泣き出す）

北川 あっ、ごめん、ごめんよ。お前たちに言ってもしょうがなかったな。ほらほら、泣くな…。

北川 (ため息)はあ…。

N そんなわたしの沈んだ心を受け止めてくれたのは、小学校以来の親友、坂井俊夫でした。彼は、中学の時に道端で基督教の説教を聞いて以来の熱心な基督教徒で、本当は牧師になりたかったようですが、年老いた母親に代わって生計を立てるため、農業を継いでいました。

北川 みんな、おれたち役場の人間が赤紙を書いていると思っている。警察から渡される封筒を届けるだけなんだぜ。

坂井 つらい役目だな。お前はまじめにやってるのに。

北川 まじめか。そりゃあ、おれなんかそれしか取り柄がないからな。でも、そうやってまじめに書き上げた名簿が軍に使われて、村の人に赤紙が来ると思うとな…。

坂井 世の中がどっかおかしくなってるんだろうな、今は。

北川 まったく、こんなおかしな話、お前にしかできないよ。

坂井 ああ。

北川 しかし、いずれお前だって、赤紙を受け取ることになるかもしれない。

坂井 …ああ。

北川 お前が基督教だっていうことは、名簿には書いていないんだ。一応、敵性宗教だからな。

坂井 気を遣わせてすまない。僕は隠すつもりはないんだが…。

北川 お前もつらいな。基督教は愛の宗教っていうけど、そんなお前だって、いざ兵隊に行けば鉄砲を担がなくちゃならない。

坂井 …ああ。

○村役場

N それから数か月がたったその年の秋のこと、再び軍の動員令が下りました。わたしは届けられた赤紙をめくって点検しながら、その中の1枚に記された名前を見て、思わず手を止めました。

北川モノ 坂井…俊夫…。

N 坂井の家に向かうわたしの足取りは、いつにも増して重くなっていました。親友を失うかもしれない、いや、あの心優しいキリスト教徒の彼が鉄砲を担ぐ姿自体、わたしには想像できないことでした。いつもなら、1枚配る都度カバンのふたをしっかりと閉め直すのですが、親友の召集に気を取られていたその日は違いました。赤紙を抱えているといういつもの緊張感がふっと途切れた、その時でした。

北川 あっ！（転ぶ。カバンの中身がバラバラと散る。強風。）うわっ、あっ、あっ。

N 石につまずいて転んだ瞬間、わたしのカバンから赤紙の封筒が飛び散り、風に舞いました。慌てて追いかけたものの、封筒はあっと言う間にかなたへと飛ばされていったのです。

北川モノ た、大変だ。

N 一人の男を兵隊に召集する赤紙、それはつまり、たった一枚でも命と同じ重みを持っているということでした。必死で辺りを探し、ほかの数通は見つけ出しましたが、どうしても坂井の赤紙は見つからなかったのです。わたしは疲労と絶望で青ざめながら、その場にぼう然と立ち尽くしていました。

<後編>

---

○坂井家

坂井 北川…。とうとう、僕にも来たのか？

北川 ああ…。

坂井 そうか。…お前、服がずいぶん汚れてるじゃないか。転んだのか？

北川 ああ、転んだ。転んで、お前の赤紙、なくしちゃった！

坂井 えっ？

北川 風で飛ばされちゃったんだ、赤紙が…(半べそ)坂井、すまない。

坂井 北川…。

タイトル 岡崎道成・作 戦争ドラマスペシャル「消えた赤紙」その後編

N わたしは北川泰三と言います。太平洋戦争当時、わたしは村役場で、兵役事務を行う兵事係をしていました。日本に暗雲が立ち込めていた1944年(昭和19年)秋、配達するはずの召集令状—いわゆる赤紙を、わたしは不注意からなくしてしまったのです。それはたった一人の親友、坂井俊夫の赤紙でした。

北川 あさって午前9時、浦和連隊に出頭してくれ。事情は役場から話しておく。汽車の切符は、明日中に何とかするから…

坂井 でも、お前はどうするんだ？

北川 …分からない。赤紙をなくしたんだ、役場はやめさせられるかもしれない…。

N そう言って目を伏せたわたしに、坂井がポツリと言いました。

坂井 赤紙は、僕が破いて捨てたんだ。

北川 …え？

坂井 北川、聞いてくれ。僕は、軍隊には入らない。もともとそのつもりだった。聖書には「隣人を愛せ」と書かれている。僕は、この神の教えに従いたいと思う。キリストに罪赦<sup>ゆる</sup>され、救われた者として、鉄砲を持つことはできないんだ。

北川 …お前、本気か？ 自分が言っていることが分かってるのか？

坂井 分かってる。覚悟の上だ。だから、君は役場に戻って、『坂井は兵役を忌避して、赤紙を破って捨てました』と言ってくれ。

北川 し、しかし…。

坂井 いいんだ。初めからそうするつもりだったんだ。だから、頼む。

N いささかの迷いもない坂井の強い口調に押され、わたしは彼の言う通りにしました。その日のうちに坂井は警察に出頭し、逮捕されました。こうしてわたしが赤紙をなくしたことは、だれにも知られることはなかったのです。

○村役場

N それから1週間ほどたったある日、名簿の整理をしていたわたしを、村長が呼びました。

村長 北川君、これはどういうことだね？

N そう言って村長が示したのは、土ぼこりの付いた封筒でした。

北川 これは…？

村長 中を見たまえ。

N 封筒の中を取り出したわたしは、心臓が止まりそうになりました。それはあの、風で飛ばされて見失った坂井の赤紙でした。

北川 こ、これを、どこで…？

村長 さっき、赤松のばあさんが届けてきた。家の裏山で見つけたそうだ。これは坂井が破り捨てたんじゃなかったのか？ 一体、どういうことなんだ！

N 村長の剣幕にわたしは言い逃れはできないと思い、事のでん末を正直に話したのです。話しながら、ああ、わたしはこれで終わりだと思いました。ところが、腕組みをして聞いていた村長の言葉に、わたしは耳を疑いました。

村長 北川君、今回のことは、ここだけの話にするように。

北川 えっ？

村長 いいか、北川君。坂井は赤紙を破った。軍にはそう報告してあるし、坂井だって自分で警察に出頭してそう言っている。それでいいじゃないか。

北川 しかし、それでは坂井が…

村長 北川君、やつは兵役を忌避したんだぞ。今まで村から何人も志願兵を出してきたのに、やつのお陰で村の名誉に傷がついた。この上、「赤紙は実は交付前になくしました」などと言えるものか。言ったところで、坂井が赦されるわけでもないんだぞ。

N 村長の言うことももっともでした。兵役忌避は、非国民の烙印<sup>らくいん</sup>を押される極めて不名誉な罪です。赤紙を破ったかどうかなど問題ではないようにも思いました。それよりわたしが赤紙をなくしたことが分かったら、わたしだけではなく、村長にも何らかの処分が下るのは確かでした。結局わたしたちは保身のため、口を閉ざしたのです。

N その後、戦局は悪化の一途をたどり、1945年(昭和20年)8月15日、日本は敗戦を迎えました。この戦争で、村から出征した人は160人。そのうち村に帰ることのできなかった人は50人を数えました。わたしの届けた一枚の赤紙が、その50人の人々の運命を決めたのです。役目とは言え、自分もその責任の一端を担ったような、後ろめたい思いがぬぐえませんでした。ところが—。

#### ○村役場

北川 焼くんですか！？書類を全部？

村長 そうだ。軍からの命令が下った。すぐに焼くんだ。

N 戦争が終わるとすぐ、軍は各役場に対して、名簿や召集関係の膨大な書類を焼き捨てるようにと命じたのです。連合軍の占領に備えた証拠隠しでした。わたしは役場の庭で書類を焼く煙を眺めながら、言いようのないむなしさを覚えました。

北川モノ おれのしてきたことは…一体、何だったんだ…？

N 村人の誤解を受けながら、それでもお国のためと信じて耐えてきた兵事係の仕事。赤紙も、戦死公報も、ためらわずに手渡したことなど一度もありませんでした。しかし、その一枚一枚の命の重みさえ、この煙とともにどこかへ消え去ってしまうようでした。

#### ○坂井家

N 坂井が服役中の刑務所で病死したことを知ったのは、9月に入ってすぐ、彼の家を訪ねた時のことでした。坂井の母親は、わたしを待ちかねたように、一冊の本をわたしに手渡しました。それは、彼が読み古した聖書でした。

母(春江) 俊夫は警察に出頭する前に、自分がもし帰ってこなかったら北川さんにあげてほしいと、これを置いていきました。

北川 これを、わたしに…?

母 あの子は、戦争が始まった時から迷っていたんです。キリスト者として戦争には行けない、でもいざその時になって、自分に兵役を断る勇気があるかどうか。怖かったんでしょう、あの子は必死に祈っていました。だから、あなたがうちに来て赤紙をなくしたと言った時、“神様が背中を押してくれた”と思ったそうです。自分だけでは言えなかった、でも北川さんがそのきっかけを与えてくれた。そして自分の決断が北川さんの助けにもなれるなら。そう言って…神様に感謝して、警察に出頭したんです。

北川 感謝して…?

N 返す言葉がありませんでした。いたたまれず坂井の家を後にしたわたしは、家に帰って受け取った聖書をぱらぱらとめくりました。手あかだけでなく、至るところに線やしるしが付けられて、どれほど坂井が愛読していたかがうかがわれました。線のある箇所を追っていくうち、ある一節が目にとまりました。

北川モノ 「人、その友のために己の命を捨つる。これより大いなる愛はなし。」  
(ヨハネ 15:13 文語訳)

N わたしをかばって自分を不利な立場に追いやった坂井。彼の信じていた神様は、この言葉によって彼の背中を押したのではないか、そんな気がしました。

北川モノ 坂井、すまない…

N 保身のために口を閉ざした自分が死ぬほど恥ずかしく、涙があふれて止まりませんでした。それからわたしは、坂井のくれた聖書をむさぼるように読んだのです。そしてわたしは、その聖書を通して、わたしの自己中心な「罪」のためにも命を捨てて下さった救い主、イエス・キリストに出会ったのです。

「人、その友のために己の命を捨つる。これより大いなる愛はなし。」

こんなわたしをも“友”と呼び、そのために命を捨ててくださったのは、ほかでもない、神

の一人子のイエスだということが分かったのです。

こうしてわたしは生まれ変わりました。数年後、わたしはキリスト教の出版社に就職し、30年近く、戸別訪問で、伝道文書を配布する仕事一筋に生きてきました。そんなわけで、わたしは今も“配達人”ですが、もはやかつてのような迷いは少しもありません。あの時は、国のために命を差し出すことを強要する赤紙の配達人でしたが、今は、このかけがえのないよい知らせ、決して失われることのない永遠の命を伝える配達人に変えられたのですから。

<完>

---

参考

小澤真人+NHK取材班「赤紙 男たちはこうして戦場へ送られた」創元社